

## 4 学生とキャリア

沖 清豪  
(早稲田大学)

### 1. 学生とキャリアとの関係を考える視座

本章はJCSS2005調査結果から回答者である学生のキャリア観およびそれを構築している経験について確認し、学士課程教育の改善にあたって考慮すべき若干の示唆を得ることを目的とするものである。

大学改革だけでなく教育改革全般において、未就業者問題はいわゆる「フリーター」「ニート」といった語彙などを通じて一般にも膾炙している。言うまでもなく、大学教育の機能は学生を就職させることに特化されるべきではないが、大学に対する社会的観念が、大学を「就職予備校」と捉え、学生をどれだけ就職させるかについて厳しく検証する状況になっており、あるいはまた大学自身が自らの卒業生の就職率を喧伝する状況を見捨てることもできない。教養教育ないし専門教育を通じて、自らのキャリア観を養成し、具体的な職業への進路決定を行なう過程として学士課程教育の四年間およびその教育機能を再検証することが求められており、全学的に、あるいは学部単位で学生のキャリア開発を重視する教育が実践されつつある大学も散見される。

とりわけ、教育機能を確認していくにあたっては、進路未決定層の問題に注目しなければならない。大学入学前に何らかの進路観や職業観を有している場合はもちろん、漠然とした将来設計を有している学生に対してどのような教育を行い、キャリア観の育成を進めるかが、学士課程教育改革における一つの焦点になるかと思われる。

JCSS2005調査は単年度の同一コーホートを対象とした経年変化を調査したものではないことにより、ここで課題となっているキャリア観の育成過程を確認することは不可能である。またキャリア観そのものを尋ねる詳細な質問項目も用意されていない。しかし調査時点での職業意識やそれとの関係で他の項目を確認することを通じて、学生自身のキャリア観とその経験との関係を検討することは可能である。以上を踏まえて、本章では質問票の14.「あなたは将来、どのような職業やキャリアに進みたいですか。」という質問で、すでに何らかの職業イメージを有している層を「キャリア決定層」、「まだ決めていない」と回答した集団を「キャリア未決定層」と定義し、その特質について明らかにすることを試みたい。

前もって、キャリア決定層と未決定層の特質を確認しておきたい。有効回答中、キャリア決定層と回答した学生は3348名(84.5%)であるのに対して、「まだ決めていない」と回

答した「キャリア未決定層」は 563 名(16.5%)となっている。学年別違いをみると、2 年生で未決定層の占める割合が多くなっている一方、4 年生ではキャリア決定層の割合が多くなっている(表 2.4.1)。また男女比では女性でキャリア未決定層が多くなっている(表 2.4.2)。なお、大学院への進学を想定している層はキャリア決定層が増加していく傾向にある。これは進路のイメージが明確になることで進学を具体的に検討するという傾向があることを示唆している(表 2.4.3)。

表2.4.1 キャリア決定層と未決定層(学年別)

		1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生	5 年 生 ~	大学 院生	科目等 履修生	その他	合計
決定層	度数	698	1758	580	242	38	21	2	5	3344
	%	86.1%	83.9%	86.7%	93.4%	86.4%	95.5%	100.0%	100.0%	85.6%
未決定層	度数	113	337	89	17	6	1	0	0	563
	%	13.9%	16.1%	13.3%	6.6%	13.6%	4.5%	.0%	.0%	14.4%
合計	度数	811	2095	669	259	44	22	2	5	3907

表2.4.2 キャリア決定層と未決定層(性別)

		男性	女性	合計
決定層	度数	2033	1266	3299
	%	87.0%	83.6%	85.6%
未決定層	度数	304	249	553
	%	13.0%	16.4%	14.4%
合計	度数	2337	1515	3852

表2.4.3 キャリア決定層と未決定層(進学アスピレーション別)

		短期大 学卒業 程度	大学卒 業程度	大学院 修士課 程修了 程度	大学院博 士課程修 了程度	その他	合計
決定層	度数	3	2149	872	264	53	3341
	%	100.0%	83.6%	88.1%	94.3%	89.8%	85.6%
未決定層	度数	0	421	118	16	6	561
	%	.0%	16.4%	11.9%	5.7%	10.2%	14.4%
合計	度数	3	2570	990	280	59	3902

## 2. 回答傾向からの示唆

### 2-1. 全体的傾向

すでに言及されているとおり、CSS 調査自身が他大学との比較を通じて、特定の大学の教育機能について評価検証し、改善策の立案に寄与することを目的としている調査であることもあり、確かにキャリア決定層についてみると、大学間での回答傾向の違いについて、統計的に有意な差が出やすい傾向にある。またキャリア決定層の集団が全体の 84.5% に達していることもあって、調査対象全体の傾向がキャリア決定層にも現れる傾向にある。

一方で、キャリア未決定層についてみると、多くの質問項目において大学間での統計的な有意な差異が消滅する傾向がある。具体的にはキャリア未決定層内で大学間でのクロス集計を行なうと、有意差が見られる項目は限定されている。また有意な差異が出ている場合とは、大学入学者層の特質の違い（例えば高校時代の成績の自己評価の差異）、文系理系の違い（理系は一般にキャリア決定層が多く、人文系学部では教員との個別の接触が多いという回答が多い大学もある）などによって生じている差など、大学間で顕著な差異が生じている項目に限られている。したがって、大学に依りて学生像は多様であるが、進路・キャリアを決定できない層については、大学間の一般的な学生像やその他の条件の違いを超えて共通する特徴を有している可能性が示唆されている。

以上のような特質を踏まえて、質問票の中で大学における教育活動とキャリア決定・未決定との関係を考察する。

### 2-2. 社会的経験による差異

質問票問 6 では社会との接点となりうる学習・非学習経験を尋ねている。キャリア決定層と未決定層を確認してみると、「正社員や契約社員など常勤で働いた」と「インターンシップのプログラムに参加した」という項目を除き、両集団の回答傾向に有意な差は見つからない。

「正社員や契約社員など常勤で働いた」経験を有しつつキャリアが未決定な学生は 3.4% に留まっている。ただしこの常勤で働いていた職業と志望している職業が一致しているかどうかについては明らかではない。いずれにせよ、職業経験は何らかの形でキャリア決定にあたって影響を及ぼしている可能性が指摘できる（表 2.4.4）。また「インターンシップのプログラムに参加した」経験を有していつつキャリアが未決定である学生も 7.2% に留まり、全体での未決定者の半分に留まる（表 2.4.5）。大学内外で提供されているインターンシップ制度はキャリア選択意識の涵養には寄与しているといえるであろう。

一方で、学内外でのアルバイト経験の有無は、キャリアを想定するに当たってほとんど寄与していないとの結果も出ている。一般にアルバイト体験は社会との接点として学生にとって現実社会の多様性などを知る手がかりとして評価されてきたが、少なくとも現状に

において、アルバイト経験がキャリア意識育成に肯定的な影響を有しているとは言いがたいようである(表 2.4.6)。

表2.4.4 在学中の常勤体験の有無とキャリア決定・未決定のクロス

		いいえ	はい	合計
決定層	度数	3262	86	3348
	%	85.3%	96.6%	85.6%
未決定層	度数	560	3	563
	%	14.7%	3.4%	14.4%
合計	度数	3822	89	3911

t検定で有意(1%水準)

表2.4.5 インターンシッププログラム体験の有無とキャリア決定・未決定のクロス

		いいえ	はい	合計
決定層	度数	3245	103	3348
	%	85.4%	92.8%	85.6%
未決定層	度数	555	8	563
	%	14.6%	7.2%	14.4%
合計	度数	3800	111	3911

t検定で有意(5%水準)

表2.4.6 学内外でのアルバイト経験の有無とキャリア決定・未決定のクロス

		学外でのアルバイト経験			学内でのアルバイト経験		
		いいえ	はい	合計	いいえ	はい	合計
決定層	度数	3348	657	2691	2994	354	3348
	%	85.6%	84.9%	85.8%	85.6%	85.5%	85.6%
未決定層	度数	563	117	446	503	60	563
	%	14.4%	15.1%	14.2%	14.4%	14.5%	14.4%
合計	度数	774	3911	3137	3497	414	3911

### 2-3. 授業に関する経験

では、教育とりわけ授業に関する経験の有無はキャリア決定・未決定の差に何らかの影響を及ぼしているのであろうか。質問票問7では、大学入学後の授業を通じての多様な質問に関して尋ねている。ここでキャリア決定・未決定とのクロス集計を確認してみると、

授業におけるインターネットの活用など制度の有無に影響を受ける設問については差異が見られないのに対して、教員や他の学生といった他者との関係で何らかの形で学習経験を深める活動の有無によって有意差が生じているとの結果が示された（表 2.4.7）。この結果は教員や他の学生といった他者との関係を深める活動の必要性、および学習を深める活動の必要性を示唆するものであり、また学生生活の多様な面での積極性（ポジティブさ）が求められていることも示唆する結果となっている。

表2.4.7 入学後未経験であると回答した学生数とキャリア決定・未決定

入学後未経験であると回答した回答数と%	決定層 %		未決定層 %		
自主的な学習プロジェクトに参加した	2413	74.4%	438	79.9%	**
学際的な授業を履修した	2174	67.8%	373	69.1%	*
授業の内容について他の学生と論議した	772	23.6%	157	28.3%	***
大学教員とその自宅や飲食店で懇親会をもった	2169	66.9%	406	73.7%	**
学内のスポーツに参加した	1839	58.7%	338	62.7%	*
提出期限までに宿題を完成できなかった	1882	57.4%	290	52.6%	
授業をつまらなく感じた	84	2.5%	3	0.5%	***
他の学生と一緒に勉強した	440	13.4%	89	16.1%	*
学生自治会の選挙に投票した	3092	97.1%	525	97.4%	
インターネットを使って授業課題を提出した	825	25.0%	142	25.8%	
インターネットを使って授業課題を受けた	1677	51.6%	279	50.6%	
研究や宿題のためにインターネットを使った	156	4.7%	18	3.3%	
アルバイトなど仕事で授業に出席できなかった	2113	64.6%	363	66.1%	
他の学生に学習補助者（チューター）として教えた	2914	90.0%	514	93.6%	*
アルバイトや家族のため勉強する時間がなかった	1639	50.2%	273	50.1%	
オフィスアワーなどの時間に大学教員と面談した	2809	86.7%	492	89.6%	

\*=5% , \*\*=1% , \*\*\* = 0.1%水準で有意

#### 2-4. 学生生活とキャリア決定との関係

一方で、授業以外の学生生活を通じてキャリア意識涵養に何らかの影響を与える活動がなかったのであろうか。問 15 では過去一年間での学生生活での経験を尋ねている（表 2.4.8）。ここでキャリア決定・未決定とのクロス集計を確認してみると、やはり他者との関係が問われる討論活動（政治・宗教）の有無、あるいはボランティア活動や留学生との交流といったやはり積極的に社会や他者と接触していくという姿勢に関して示されているキャリア決定層と未決定層の違いが注目される。

なお「憂鬱で落ち込んだ」という項目では決定層がそうした経験を相対的にしていないことが示されているが、ホームシックやカウンセリングの有無については差異が見られない。ここで示されている「憂鬱」とは漠然とした気持ちの持ちようであることがうかがわれる。

表2.4.8 この一年で未経験であると回答した学生数とキャリア決定・未決定

この一年で未経験と回答した回答数と%	決定層 %		未決定層 %		
ビールやワインなどアルコール飲料を飲んだ	219	6.6%	44	7.9%	
喫煙した	2677	80.4%	457	81.6%	
寂しくて、ホームシックになった	2507	75.4%	435	77.7%	
留学生と交流した	1992	59.9%	370	66.0%	**
憂うつで、落ち込んだ	978	29.4%	124	22.1%	**
やるべきことの多さに圧倒された	569	17.1%	101	18.0%	
礼拝や宗教的な儀式に参加した	2546	76.5%	443	79.1%	
ボランティア活動を行った	2626	79.0%	467	84.0%	*
政治について討論した	2025	60.8%	380	68.0%	**
授業や約束に寝過ごしたりして、行けなかった	845	25.4%	102	18.2%	**
個人的にカウンセリングを求めた	3086	92.9%	519	92.8%	
美術館や博物館を訪れた	1718	51.6%	329	58.6%	**
宗教について討論した	2638	79.4%	479	85.5%	**

\*=5% , \*\*=1%水準で有意

## 2-5. 進学理由とキャリア決定

キャリア開発にあたり、なぜその大学、その学部に進学しようとしたのか、大学入学以前の意識を無視することもできない。とりわけ、ポジティブ学生とネガティブ学生の差異が明らかになっている入学の意図については、キャリア決定にあたって何らかの影響を与えている可能性に留意する必要がある。

こうした観点で集計結果を確認してみると、「就職に有利だから」という具体的な理由で当該大学に進学した学生間でキャリア決定・未決定に有意な差は生じていない一方、「すぐに働きたくなかったから」という理由での進学者内では有意な差が生じている(表 2.4.9)。「とても重要」「少し重要」と回答した割合は、キャリア決定層で 36.3%に留まるのに対して、未決定層では 49.4%とほぼ半数に達している。さらにこの働くという意識と関連する将来を見越した資格取得についてみても、未決定者層では「資格をとるために必要だったから」という理由を挙げている回答が少ないという特徴を有している。具体的にはキャ

リア決定層では「とても重要」「少し重要」と回答した割合が38.7%(1274件)なのに対して、未決定層では26.6%(145件)に留まっている。

以上の回答傾向は入学時のキャリア支援が必要であり、かつそれがその後のキャリア決定・未決定に影響を及ぼす可能性のあることを示唆するものとなっている。

表2.4.9 進学理由「すぐに働きたくなかったから」とキャリア決定・未決定

		まったく重要でない	あまり重要でない	少し重要	とても重要	合計
決定層	度数	1274	820	870	325	3289
	%	38.7%	24.9%	26.5%	9.9%	100.0%
未決定層	度数	142	133	189	79	543
	%	26.2%	24.5%	34.8%	14.5%	100.0%
合計	度数	1416	953	1059	404	3832
	%	37.0%	24.9%	27.6%	10.5%	100.0%

### 3. むすび キャリア形成にあたっての留意点

以上のように示されたJCSS2005におけるキャリア決定・未決定をめぐる学生の特徴は、従来から学士課程段階におけるキャリア教育、キャリア開発の必要性を提唱する議論を支持するものとなっている。さしあたり以下の点については留意する必要があると思われる。

第一に、入学時におけるキャリア意識を確認することの必要性である。すでに専門教育を大学院段階で実施し、学士教育段階では教養教育の充実が目指されているとはいえ、本調査結果では、どのような職業をイメージして大学生活を過ごすかが、生活後半における就職活動において一定の影響を与える可能性が示されている。労働市場に高卒という学歴資格で入場することを回避するために大学進学を選択した層が増加していくに対応して、入学時から大学側からの働きかけを行なっていくことが必要になっているのであろう。

第二に、アルバイト以外の諸活動、とりわけ多様な方法による学習活動や学生集団での活動といった、学生に主体性・自律性および社会性を獲得できるような教育プログラムとそれを明確にする学習・生活指導がとりわけ必要になっていることを指摘できる。とりわけ学生同士での学習活動ないしボランティアなど社会的活動がキャリア意識を涵養するだけでなく、学生生活全体の充実度を高めていくことになるとするならば、個々の学生を意識した形での指導体制が就職指導だけでなく教学面でこそ求められていることが示唆されているように思われる。

なお、以上のような論点については、JCSS型の調査を継続的に実施して、学生の経年変化を確認していくことが今後の課題である。

